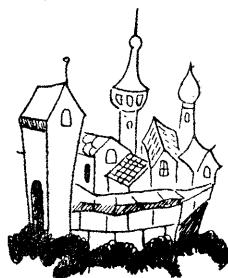


小さいあげはの子

鉢木正子



はしがき 保育室に昆虫飼育箱を置くよ
うになつてから子供達は、なおさら虫がす
きになつた。六月末のある日のことSちゃん
が黄あげはの幼虫を三四程、からたちの
板にとまらせて持つて来てくれた。

前々から鉢つてみたいと想つていた虫な
のでうれしかつた。鉢育箱の中は丁度かた
つむりで一ぱいだったので、大きなびんに
砂を二センチ程入れてその枝をさし、ガー
ゼでびんの口をおよい幼虫の家とした。さ
てその日から幼虫の唯一のごちそうのか
らたちが必要になつた。若いやわらかい葉
を、傘をさして子供達と取りに行つたこと
もあつた。

幼虫は、良く入れてやつた葉っぱをたべ
た。始めの中は黒い何だかきたならしい幼
虫に子供達も無関心だつたが、毎日えさを
やつてゐる中に他の虫たち同様に愛着を感
じ出したらしく、七月に入つた頃には大変
積極的に世話をするようになつた。一晩の
中に黒いきものが緑に變つていたり、みど
りだつた芋虫が一寸の間に蛹になつてしま
つたり、子供達は一々驚いたり感心した
り、びんの中をのぞく顔も真けんになつて
來た。

もうすぐ蝶が生れる最終の段階までやつ
て來た頃に、夏休みが近づいて來た。
夏休みに入る前に、どうか蛹から蝶が生
れてくれるることを祈つていたにもかゝわら
ず、三つの蛹は一つも蝶にならなかつた。
終了の日、子供達は心をのこしてかえつ
て行つた。私はみんなの代りに良く観てお
く約束をした。そこで私はびんを家に持つ
て帰つた。その日から毎日三つの蛹とにら
めつことをして、蝶の誕生をまつた。

三つの蛹の一つはとう／＼何も出て來な
かつた。一つは生まれながら、からがら革
く取れないで死んだ。そしてたつた一つだ
けが立派な蝶になることが出来た。

後半に至つて私は、蝶と一緒になつて思
いがけない心配をしたり、よろこびにひた
つたりする様になつた。私はつくづくと幼
児達と此處まで一緒に観たかったと想い、
無計画な鉢い方をしたことを残念に想つた
のである。

私は二学期に入つてから幼児たちにその経過を報告したがどうしても物足らず、何とかしてこの蝶の成長の有様を幼児たちに一貫して知らせ度い、又小さいものゝあわれさと、小さいながらも伸びようとする命のたくましさ——。そうしたものをお話にして見たいと想うようになつた。

そして生まれたのが此のつたない一編であつた。

幼児たちはこの話を興味をもつて聞いてくれた。お話をしながら私は又是非あげはの幼虫を飼つてみたないと想つた。

今度こそ大きな蝶々になるまで、みんなして育てよみたいものである。

小さいあげはの子

ある夏の空の青く晴れた日でした。黒いきものに黄色い紋を染めぬいた、あげは蝶のお母さんは、さつきからひらくと高く低くとんでいました。お母さんの蝶はどこに卵をうもうかと考えているのでした。その時です、あげはのお母さんは小さい頃すきだつた、からたちの葉っぱを想い出しました。あの木はとげとげのいたい木ですが

若い葉っぱは何とも言えないおいしいおいしい味がしましたつけ、あゝあの木がいいお母さんは、今とんで来た道をひきかえしました。そして学校のまがり角にある、からたちの葉のうらがわに卵を一つうみました。「早く大きくなるのよ」とお母さんは卵にそろそろやくと、又ひらひらと舞い上りました。そして安心したようにとんで行つてしましました。からたちの葉に卵は落ちないようにしつかりとつかまって居りました。

「早く大きくなるのよ」と、からたちの葉っぱも卵にさやきました。雨がふつても卵は葉っぱと葉っぱの間に安心していることが出来ました。風が吹いても卵は葉かけで眠ることが出来ました。だれにもだれにもみつからないで、卵はいることが出来ました。その日も空の青く晴れた日でした。ちょうどお母さんが産んでから六日目のことでした。卵はぼっかりといもむしに生まれ変りました。小さな小さな、目に見えない程の黒い、いもむしの赤ちゃんは、頭を少しうごかして見ました。

そして「坊や仲良くしようね」といいました。お母さんは「坊や、兄ちゃんのいうことを良く聞くのですよ」とおしゃいました。坊やがかわいい頭をふると、お母さんは又安心したように高い窓にむかって、とんで行つてしましました。

「もつともつとお喰べ、からだがみどりに變るまで」お兄さんはいました。赤ちゃんはそういうわれると、もつともつ

からはしまでを長い時間をかけて歩いてみました。赤ちゃんは、だんだんおなかもすいて来ました。

「私をたべてごらんよ」と、からたちの葉が教えてくれました。赤ちゃんは小さい口で少しばかり葉っぱのはじをかんで見ました。それはやわらかいおいしいものでありました。赤ちゃんは、もくもくもくと歩いては、葉っぱのごちそうをいたたきました。

ある日のこと、お母さんはお兄さん蝶をつれてやって来ました。兄さんも又お母さんのように、きれいな羽根をして居りました。兄さんは小さい弟を見てよろこびました。た。

「もつともつとお喰べ、からだがみどりに變るまで」お兄さんはいました。赤ちゃんはそういうわれると、もつともつ

と元氣が出でもりもりと喰べました。

そうして幾日かたつ中に、赤ちゃんは立ぱな子供のいも虫になりました。頭に一寸白い帽子をつけて、あちらこちら歩けるようになりました。いも虫は何とかして、もつと遠い所まで行つて見たいと考えるようになりました。

いも虫は毎日遊びにやつて来る兄ちゃんに、そろそろだんしました。けれど、お兄さんはその度に首をふつて、まだまだいけないといいました。いも虫はとうくある朝、だれにもだまつて一人で出掛けることにしました。

からたちのとげとげの枝から枝へ、そろくつたわって歩いて行くことに致しました。何とかして歩いて行つたなら、もつとく良い所に行けるような気が致しましたから――。

しばらく行くとあちらから、はねをひかせたこがね虫のお爺さんがやつて来ました。お爺さんはひげをうごかしながら、どこに行くのかと聞きました。

「いいところへ行くの」いも虫は元氣一ぱいに大きな声で答えました。

「何、いいところへ行くの」

の短かい足でねえ」といました。そして、「まだ早い早い」と首をふりました。いも虫の坊やは首をもち上げて、不平そうにからだをふくらませ、「だつて」といかけましたがお爺さんは、やつこらやつこら行つてしましました。体中が汗ばんで、いつも坊やは急にくたびれて、ひとやすみしだくなりました。じつと、からたちの枝に止まって息をしすぎて眼をつむりました。そしてどの位たつたでしょう――。

『けんけんけむし はだかむし

あめにぬれたら つめたから

はっぱのかげに かくれても

おまえをさがす とりがいる

とりのおめめは まあるいぞ

はやく はやく ちようとなれ』

という子供のうたごとに、いも虫は小さな眼をあけて見ました。子供が二、三人足を止めてうたつていてました。

「ね、あげはの子だよ。今はきたない虫だけれどいまにきれいな蝶になるのだよ」

大きな子供が小さい子供に説めいしてやっているのがきこえました。みんな良い子ば

かりでした。そして父歌をうたいながら行つてしましました。いも虫は耳をかたむけ

て、はじめて自分のうたを聞きました。そして、はじめて自分もお母さんやお兄さんのように、きれいな蝶々になれるのだといつことを知りました。それから自分を喰べに来るこわい鳥のいることも知りました。お兄さんも、又これがね虫のお爺さんも、遠い所へ行つてはいけないと言つたわけもわかりました。いも虫はそうすると急に、はかげの家が恋しくなつてしまりました。

いも虫の足は急に家の方に向かつて居りました。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と、知らない間に大きな声で言つて居りました。でもいも虫は、帰りみちの枝の上から下の水たまりに、自分をうつす事を忘れませんでした。水溜りにうつった自分は、なる程まづくろな足の短かい頭の大きないも虫ありました。ほんとうだ、ほんとうだと、いも虫は首をすくめて言いました。お兄さんは心配していも虫をさがして居りました。鳥に喰べられてしまつたのかと泣いて居りました。

翌日から、いも虫の坊やは遠い所へ行くことをやめました。時々じつとして「早く蝶々になりたい」と、そればかり想つて、いも虫の坊やは、からたちの葉も喰べないでじつとしている日が多くなりました。いも虫の坊やは、日がつくようになりました。幾日たつたでしょうか――。

ある日のこと、お兄さんがやつて来て、「もうその洋服もぬぎましよう」と申しました。いも虫はびっくりして、「どうして?」と聞きました。「又一つ大きくなるのです」とお兄さんが教えてくれました。そう言えば、もう黒い服は、どこからどこまできつくて、一寸うごけば破れそうでし。た。洋服をぬいでは一つづつ大きくなつて来たいも虫の坊やは、今度は四つになるのです。いも虫はいよく蝶々になれるのかと想いました。そして、少しづつ少しづつ洋服を後え後えとすらしてぬいで行きました。

翌朝のこと、おとなりの天とう虫のおばさんに先ず「まあ、大きくなつて、綺麗なきものだこと!」と、おどろかれました。いも虫は、もう蝶々になれたのかと、大きい虫は、もう蝶々になれたのかと、大き

な頭をふりながら水たまりをさがして自分をうつしてみましたが、残念なことにあの大きな羽根は、まだ生えておりませんでした。でもそのかわり、美しい緑の眼のすばらしいこと、葉っぱのみどりと同じよう、そしてせなかには黒いしままで入つて居りました。

「あ、うれしい!」と、大きくなつたいも虫は大きな声で言いました。みどり色のいも虫になると、もつともっと元気が湧いて来ました。お兄さんのおっしゃることを聞いて、せつせとたべて良く運動することに致しました。そうすると大きな大きなあげは蝶になれそうな気がしたからです。いも虫はやはり遠くに出かけることをやめました。何時お兄さんが大切な仕事をいいました。お兄さんは大切に枝にからだをとまらせようとしました。

「ちがう、ちがう。おしりの先で枝にとまって、足を上にしてさ」とお兄さんはおしゃべりました。いも虫は今度はまちがうまいとがんばっている中に、とうく枝にとりつくことが出来ました。じつとそしうで止まるとき、体中がかたくなつたような気がしてきました。

「あ、出来たね。ではおやすみよ」とお兄さんの声が遠くにしたよな気がしました。いも虫は中でも太そうな枝をみつけてお兄さんをよびました。お兄さんは、「さあ、いよいよ蝶々になる仕度ですよ。これから、あなたは蝶になるの

だよ。一度かたいからの中に入ります。そして、この次うまれる時こそ蝶々になりますよ」と、いも虫の頭をなぜていいました。

お兄さんは「さあ、口から糸をお出し。そしてあなたのみつけた枝にしつかりと、おんぶするのですよ。そうしつかり、しつかり」と、はげまして下さいました。

いも虫は頭をまわして糸を枝にかけました。いも虫はお兄さんに言われる通りに致しました。そして何とかして枝にからだをとまらせようとしました。お兄さんは「おやすみよ」とおしゃべりました。いも虫は今度はまちがうまいとがんばっている中に、とうく枝にとりつくことが出来ました。じつとそしうで止まるとき、体中がかたくなつたような気がしてきました。

ふくろの中に入ったような形になってしまいましした。いも虫はいつもお兄さんが又遊びに来て下さるだろうと想いながら、何時の間にか、ぐっすり眠ってしまいました。

青空に白い雲が、ぱっかりぱっかり流れて行きます。それはそれは大きな羽根でした。二つの羽根をうごかすと、どんな高い所までもとべる様な気がしました。花が沢山咲いて風にゆれています。白い花に、青い花に、赤い花に、いも虫は次々と花の家をたずねてとびまわりました。花はおいしい蜜を一ぱい溜めて、まつていってくれました。花畠の中にはいつかの、こがね虫のお爺さんも居りました。

「お、お、きれいになつたのう。もうどんなん遠くにでも行つて良いよ」といいました。てんとう虫のおばさんも、又あの虫の子供のころ会つた子供たちも「きれい、きれい」と、手をたいて見送つてくれました。いも虫は、どこまで高くとべるものかと考えました。お日様の所、そうだ、そうちだ、あそこまで。いも虫は羽根を一ぱいにうごかしてとぶことにしました。
上へ！ 上へ！ 上へ！ 羽根は

いくらとんでも疲れませんでしたが、お日に近づくと、さすがに芋虫はのどがかわいて来ました。それに、まぶしくてまぶしくて想わず眼をつむりました。あゝ暑い、あゝ暑い。

その時「もう起きるのだよ」という声を芋虫は聞きました。

「もう少しなのに」と、いも虫は言いました。
「寝ぼけてはいけません。とうく蝶々になれただよ」それは聞きおぼえのあるお兄さんの声でした。

芋虫はびくっと体をうごかして起きようとした。みんな長い長い夢だったのです。体を動かすと、きうくつな固いからもがさりとうござきました。何時の間にか、からとからだが別々にはなれていることに気がつきました。うす茶色のからを透かして外を見ると、お兄さんが早く早くと呼んで居ました。思いきつて首をふりますと、からの背がびーんと割れました。からのわれ目から羽根を卷いたまゝ、すべり出しました。もういも虫ではありませんでした。

「ほんざい」子蝶は大きな声を上げま

した。たゞんだ羽根を順々にひろげて行くとお兄さんと同じもようが出て来ました。長いひげもありました。大きな二つの目もありました。

「お目出とう」とお兄さんは羽根をばたばたさせてとびまわりました。

「ちょうどお母さんが卵を産んでから、三十日目ですね」と、からたちの葉が言いました。

とうく小さいいも虫の赤ちゃんは、あげは蝶になれたのです。

夢にまで見た良い所へもう一人でも行けるのですよ。

子蝶は先ず水溜りをさがして自分の姿をうつして見ようと思いました。

さあ、これからどんないことがあっていいでしょうね。

「子蝶さん、おめでとう」とみんなも言って上げましょうね。